

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：10102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25580150

研究課題名(和文)北海道・東北を中心とする北方交易圏の理論的枠組み構築のための総合的研究

研究課題名(英文)A comprehensive study to construct a theoretical framework for the northern trade area where Hokkaido and Tohoku are the center of trade

研究代表者

百瀬 響(MOMOSE, HIBIKI)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10271727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、古代から近代初期において、本州(主に東北地域)と北海道との間で行われた交易について、資料の所在に関する目録を作成し、かつそれらの資料の分析を行った。

特にアイヌとの交易では、威信財に関し、装飾品であるガラス玉を越田が、陶磁器に関して関根が、菊池が煙草等の嗜好品に関して分析した。さらに遠藤は、災害時等にアイヌが管理していた物品(馬を含む)をめくり、アイヌ・和人双方がどのような行動を行ったかを明らかにし、品田が口頭伝承において、交易物資がどのように扱われているかを研究した。百瀬は漁場労働での支給品やアイヌによる購入品に関し論文を発表し、本研究における資料目録・論文集を作成した。

研究成果の概要(英文)： In this study, we made a catalog where trade material is located to be carried out between Honshu (mainly Tohoku District) and Hokkaido early in the present age from the ancient times and analyzed these materials.

Especially in trade with the Ainu, in relation to prestige goods, Koshida studied ornaments glass beads and Sekine researched on ceramics. Kikuchi analyzed cigarettes favorite items. Furthermore, Endo revealed what kind of actions both Ainu and Japanese(Wajin) made about materials managed by the Ainu(including horses) during disasters. And Shinada studied how trade goods are handled in folklore in Ainu. Momose published the articles about supplies and payment for Ainu at fishing labor in 1880s' Hokkaido. Then Momose made a material catalog in this research and collected papers.

研究分野：アイヌ・北方民族に関する文化人類学的研究

キーワード：北方交易圏 アイヌ アイヌ玉 陶磁器 し好み 余市場所 近世北海道災害史 口頭伝承

1. 研究開始当初の背景

北海道独自の文化である縄文時代、オホーツク文化/擦文時代は、石器あるいは土器と本州・大陸からの交易品である鉄器を用いる金石併用文化であり、このような南方と北方からの交易品は、その後のアイヌ文化形成に影響を与えたと考えられている。アイヌ文化期においても、本州・大陸からの交易品は、他集団との交換・補償、漁場の給料や儀礼の場で近代初期まで必須とされる「威信財」であった。

アイヌ文化形成に、本州および大陸からの交易品が必須であったことは、考古学の分野で多くの知見が提出されてきたほか、歴史学でも、中世および近世における大陸との交易、あるいは松前藩や漁場労働を經由して流入した威信財の存在が指摘されてきた。

しかしながら、これらの交易品に関し、系統的かつ通時的な交流史・物質文化史研究、特に、北海道・東北を中心とする交易圏に関しては、個々の研究者がその存在を念頭におきながらも、地域的・時代的に大きく概観する研究に発展することはなかった。そのため、交易という経済活動の実態を通じ、北海道・東北にかつて混住してきた人々の関係変遷について、物質文化を含む具体的資料に基づく総合的な基礎研究が待たれる状況にあった。

2. 研究の目的

北海道・東北を中心として古代から近代初期まで存在したと考えられる「北方交易圏」の理論的枠組み構築には、文化人類学のみならず、考古学・歴史学・地理学など複合的な研究手法を用い、日本文化とアイヌ文化双方の比較研究を行うことが必須である。本研究では、国内の物質文化資料・文献史料に関し、実地調査とその系統的整理(目録化)を行い、威信財がアイヌのみならず、東北・北海道を中心とする交易圏でどのような価値と社会的位置付けを得ていたかを考察するための基礎資料および分析的視点を提供することを目的とした。

3. 研究の方法

威信財の流入経路・産地分析による交易圏の推定から近代初期に至るアイヌ交易という実態に則して分析する方法を取ることによって、北海道・東北の各居住者間の関係性を明らかにする。以下、研究期間内に明らかにしようとする方法を、以下の諸点に分けて記す。

(1) 考古学的知見に基づく物質文化研究において、交易品として利用されていたガラス玉・陶器について、発掘出土資料ほか国内資料調査を試み、年代(古代から近世)・類型の系統的整理を行うとともに、文献史料をもとに、交易圏の範囲の実態を分析する。

(2) 歴史学的手法によっては、国内の文献

調査を通じて、交易品の種類・流入経路を系統分類する。さらに、交換レート分析を行い、和人との儀礼的交換の具体的内容を明らかにする。近代以降、交易品の一部が統制された点については、交易窓口になった広業商会の文献調査・分析を行い、統制・禁止の実態と交換レートの明確化、近世から近代初期における交易品の価値変遷を明らかにする。

(3) 地理学においては、近世アイヌの場所労働に伴う移動、自らの生活のための主体的・自律的移動、威信財の移動の経路想定を明確化する。また、文化人類学的手法を用いて、金田一文庫など国内のアイヌの口頭伝承資料から交易活動の描写に関して、オーラル・ヒストリーに残されている形態と特徴を分析する。

(4) 以上の調査で協力を受けた余市町で、研究期間中、余市町民ほか、広く一般に公開するシンポジウムを開催し、さらに目録および論考を掲載した報告書を作成する。

4. 研究成果

(1) 考古学分野においては、国内の発掘出土資料・文献調査を通じ、年代(古代から近世)・類型の系統的整理を行った。研究分担者の越田は、主に装飾品として用いられたガラス玉について、目録「ガラス玉出土遺跡地名表(北海道編)」を作成し、現時点での資料・研究状況を示すとともに、「余市町大川遺跡出土のガラス玉」に関して論じた。

研究分担者の関根は、陶磁器に関して「近世陶磁器出土遺跡地名表(北海道・旧樺太・千島編)」を目録化した。両者ともに、その分析結果を論文・図書により発表した。

(2) 歴史学では、交易圏の範囲や交易品の種類・流入経路を系統分類した。研究協力者の菊池は、「林家(竹屋)文書における煙草類に関する記述目録」と、「場所経営における煙草の機能 ヨイチ場所を例に」および「アイヌ交易品としての煙草とその値段」の2論考を通じ、嗜好品である煙草が、アイヌ社会に及ぼした影響について論じた。

研究代表者の百瀬は、近代以降、交易の実質的窓口となった広業商会の資料調査を行い、「広業商会によるアイヌ購入・販売物資に関する資料目録」を作成した。さらに、広業商会が引き継いだ業務の一部に関し、報告書でアイヌ-和人間の交換を論じた(『余市町史』『林家文書』における余市場所安政4年交換レートについて)ほか、これらの成果を、教育分野で今後還元する方法等について論文を発表した。

(3) 地理学においては、近世アイヌの場所労働に伴う移動、自らの生活のための主体的・自律的移動、威信財の移動の経路想定を研究課題に、研究分担者の遠藤が、「文政5(1822)年の有珠山噴火に伴う和人とアイヌの移動に関する資料」ほか、論文を複数発表した。同研究では、近世の災害時、威信財および重

要な財産であった「馬」を、アイヌや和人がどのように守ろうと行動したかについて、具体的に論じた。

文化人類学の分野では、研究協力者の品田が、「北海道・東北地方における和人とアイヌの交易に関する文献目録(金田一文庫編)」「同(知里真志保文庫編)」を作成し、口承文芸からみるアイヌの交易 金田一文庫と知里真志保文庫を中心に」で、口頭伝承資料における交易活動の描写から、交換の特徴を論じた。

(4) 研究期間中、余市町教育委員会および、よいち水産博物館の協賛のもと、余市町民ほか、一般に公開するシンポジウムを開催し、その成果を公開した。さらに発表内容をもとに作成した論考を、報告書に掲載した。

以上、交換物資に関する流入経路・産地分析による交易圏とその実態を明確化する上で、古代から近代初期にいたるまで北海道に居住してきた様々な集団の関係性とその社会・文化を分析するための基礎資料を提供し、かつ今後の研究に資する上で、一定の成果を果たしたと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計24件)

百瀬 響 2016 「アイヌ文化教材化の要点について(3): アイヌ文化を小学校社会科の地域学習に含める際の留意点について」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』66-2 北海道教育大学 pp.89-98 査読無

百瀬 響 2016 「開拓使札幌本庁による最後のオムシャ施行について 付: 早川昇再録アイヌ語通辞資料」『いしかり砂丘の風資料館紀要』6 いしかり砂丘の風資料館 pp.51-64 査読無

越田賢一郎 2015 「アイヌ文化におけるシトキの成立」『季刊考古学』113 雄山閣 pp.62-66 査読有

越田賢一郎 2015 「沙流川歴史講座『北海道出土のガラス玉』」『沙流川歴史館年報』16 pp.33-52 査読無

越田賢一郎・乾 芳宏・中村和之・高橋美鈴 2015 「北海道余市町大川遺跡から出土したガラス玉等の成分分析」『札幌国際大学紀要』46 pp.107-114 査読無

関根達人・佐藤里穂 2015 「蝦夷刀の成立と変遷」『日本考古学』39 pp.91-111 査読有

関根達人 2015 「北方史とアイヌ考古学」『季刊考古学』133 pp.14-19 査読有

遠藤匡俊 2015 「1822年の有珠山噴火による被災者の熱傷の程度の推定: 1991年雲仙普賢岳噴火による被災状況との比較」『季刊地理学』66-3 pp.155-175 査読無

百瀬 響 2014 「アイヌ文化教材化の要点について(2): 本学学生による『未開』イメージの変化とその問題点に関して」『北海

道教育大学紀要(教育科学編)』65-2 北海道教育大学 pp.45-54 査読無

越田賢一郎・坂梨夏代・竹内 孝・中村和之 2014 「北海道のトマノ遺跡から出土したガラス玉と銭貨の成分分析」『札幌国際大学紀要』45 pp.147-153 査読無

越田賢一郎・竹内 孝・中村和之・高橋美鈴 2014 「出羽井森塚遺跡から出土したガラス玉と管玉の成分分析」『井森塚遺跡: 認定子ども園出羽大谷幼稚園・大谷保育園建設工事に伴う発掘調査報告書』 pp.57-59 査読無

関根達人 2014 「アイヌの宝物とツクナイ」『人文社会論叢(人文科学編)』32 pp.1-26 査読無

百瀬 響 2013 「アイヌ文化教材化の要点について(1): アイヌ文化形成期までに關して」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』64-1 北海道教育大学 pp.33-42 査読無

越田賢一郎 2013 「平泉文化の鍋と玉 北海道とのつながり」『平泉文化研究年報』13 pp.33-45 査読無

遠藤匡俊・土井宣夫 2013 「1822年の有珠山噴火によるアイヌの被災状況 死亡者数の確定と生存の要因に関する考察」『地理学評論』86-6 pp.505-521 査読有

[学会発表](計19件)

越田賢一郎、「苫小牧市美術博物館のガラス玉」(招待講演)、苫小牧市美術博物館コレクション展講演、平成28年3月5日、(北海道、苫小牧市美術博物館)

百瀬 響、「函館とアイヌ文化」(招待講演)、函館市中央図書館第二回郷土の歴史講座、平成27年7月18日、函館市中央図書館(北海道)

越田賢一郎、「アイヌ玉研究の現状と課題」平成27年2月21日、平成26年度アイヌ文化財専門職員等研修会講演(北海道、札幌市)

遠藤匡俊、「御所野遺跡周辺の縄文集落の姿: アイヌ集落との比較」(招待講演)、平成26年2月23日、平成25年度御所野遺跡調査成果発表会(岩手県、御所野縄文博物館)

遠藤匡俊、「1856-1869年の三石場所におけるアイヌ集落の規模と住居跡数」平成26年3月27日、日本地理学会春季学術大会(東京都、国土館大学)

百瀬 響、「北海道における教員養成大学学生の既存アイヌイメージ形成過程について」平成26年5月16日、第48回日本文化人類学会(東京都、幕張メッセ国際会議場)

遠藤匡俊・駒木野智寛、「竪穴式住居の出入口の方位からみた縄文集落の特徴: 縄文時代中期後半の岩手県域を例に」平成26年5月16日 東北地理学会・春季学術大会(宮城県、仙台市戦災復興記念館)

関根達人、「近世考古学研究への取り組み: 北方史と近世考古学」(招待講演)、平成26年5月18日、日本考古学協会第80回総会セッション1(東京都、日本大学)

遠藤匡俊、「1822年の有珠山噴火による被災者の熱傷の程度の推定」、平成26年10月11日、東北地理学会・秋季学術大会(山形県、山形大学)

百瀬 響、「アイヌのくらしと火の利用：家を焼く送り儀礼」(招待講演)平成26年11月1日、縄文遺跡群世界遺産登録推進シンポジウム(岩手県、一戸町コミュニティーセンターホール)

越田賢一郎、「アイヌ玉について」、平成26年12月18日、第33回ガラス工芸学会・研究会(東京都、東京藝術大学)

越田賢一郎、「装身具の歴史：続縄文文化からアイヌ文化へ」(招待講演)平成25年8月24日 美幌博物館講演会(北海道、美幌博物館)

越田賢一郎、「日本最北の文化の交差路『礼文島』」(招待講演)平成25年9月15日、船泊遺跡出土遺物重要文化財指定記念シンポジウム(北海道、礼文町教育委員会)

百瀬 響、「アイヌ文化教材化に関する問題点と留意点について」、平成25年10月5日 日本教育大学協会研究集会(北海道、札幌全日空ホテル)

越田賢一郎、「遺跡出土のガラス玉：続縄文文化からアイヌ文化へ」(招待講演)平成25年11月8日、「遺跡出土のガラス玉展」(北海道、沙流川歴史館)

〔図書〕(計5件)

百瀬 響、「アイヌのくらしと火の利用：土の住居と家を焼く送り儀礼」、同成社、高田和徳編、火と縄文人、2017 pp.41-60

関口明、坂梨夏代、越田賢一郎、亜璃西出版、『北海道の古代・中世がわかる本』、2016、248p.

関根達人、吉川弘文館、『中近世の蝦夷地と、方交易』、2014、407p.

菊池勇夫、『アイヌと松前の政治文化論：境界と民族』 校倉書房 2013 430p.

越田賢一郎、インテリジェント・リンク、「7世紀の北海道 土師器文化と擦文文化とオホーツク文化」、北の縄文文化を発信する会編、『縄文人はどこへいったか』 2013、pp.96-119

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

シンポジウム 平成27年11月29日「北海道・東北を中心とする北方交易圏の理論的枠組み構築のための総合的研究」シンポジウム(北海道、余市中央公民館)

百瀬 響「幕末余市場所における交換レートの変遷：威信財と文化変容」

菊池勇夫「場所経営における煙草の機能：ヨ

イチ場所を例に」

遠藤匡俊「文政5年の有珠山の噴火活動と人々の対応：アイヌと和人の関わり」

越田賢一郎「余市町大川遺跡出土土玉類について」

関根達人「余市町入船遺跡から出土した酒樽の歴史的意義」

品田早苗「伝承にみるアイヌの交易：金田一文庫を対象として」

乾 芳宏「余市のアイヌ文化」報告書

『北海道・東北を中心とする北方交易圏の理論的枠組み構築のための総合的研究』文部科学省平成25年度～平成28年度科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)研究成果報告書、平成29年3月(北海道教育大学札幌校 278p.)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

百瀬 響(MOMOSE, Hibiki)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：10271727

(2) 研究分担者

越田賢一郎(KOSHIDA, Keniciro)
札幌国際大学・人文学部・教授
研究者番号：70585710

遠藤 匡俊(ENDO, Masatoshi)
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：20183022

関根 達人(SEKINE, Tatsuhiro)
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：00241505

(3) 研究協力者

菊池 勇夫(KIKUCHI, Isao)
宮城学院女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：20186191

品田 早苗(SHINADA, Sanae)
國學院大學北海道短期大学部・兼任講師